



連載 I  
あの町この町  
第56回

# 開拓者精神——北海道・森町

ドイツ文学者・エッセイスト

池内 紀  
(イラスト―著者)

北海道の森町<sup>もりまち</sup>を知る人は少ないだろう。「森」のつく町というのと、たいていの人は「森の石松」ゆかりの駿州・秋葉街道の宿場町をいうのではあるまいか。同じ森町でも、こちらは火山の裾野にある港町で、清水の次郎長一家が活躍していたころは、ほんの小さな漁業集落だった。

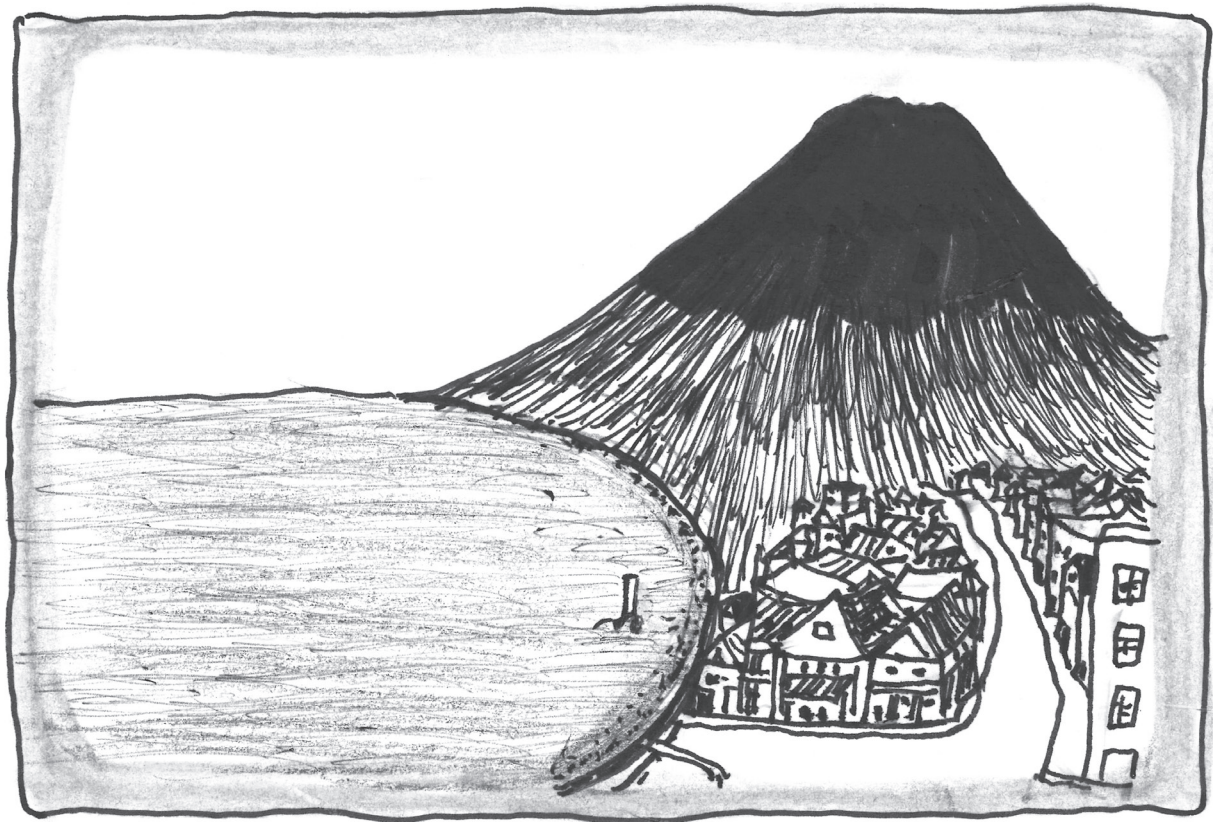
知られることは少ないが、北海道の森町はとてもステキな町である。歩いてたのしい。町のホテルに泊ってもいいし、郊外の濁川<sup>かわ</sup>温泉に宿をとるのもいい。その湯けむりは温泉客をあたためるだけでなく、冬でもまっ赤なトマトを実らせ、もつともクリーンな電気を生み出している。

JR森駅の駅前広場から海に沿うかたちで、新旧のメインストリートがのびている。海近くが旧の方で、一丁分へだたったのが新である。旧道の駅舎裏手すぐのところに「史跡 森棧橋跡」の標識が見える。正確にいうと棧橋入口であって、あいだに函館本

線の線路が横切り、辺りは駅構内にあたるので、棧橋跡へ行くことはできない。

説明板によると、明治五年（一八七二）、函館―森―室蘭―札幌を結ぶ「札幌本道」の開削が始まり、翌年、森棧橋が完成。脚材を海に打ちこみ、板を渡しただけの簡便なスタイルで、全長二五メートル。栗の木を使用し、そのころ近くの鷲ノ木村で石油が湧出していたので、それを橋脚の防腐剤に用いたという。つづいて函館―森間に船の運航が始まり、漁業集落が急速に港町として発展しはじめた。

札幌本道の完成を待って明治十四年（一八八二）九月、明治天皇が北海道巡幸に訪れ、その際、森棧橋に上陸。当時の森村の全村民が、かしまって天皇を迎えたことだろう。やがて定期船が大型化するとともに函館―室蘭便が開設され、森便は廃止のうきめをみた。明治四十一年（一九〇八）、民間会社が運航を再



森町と駒ヶ岳

開。だが、昭和三年（一九二八）、国鉄函館本線の開通にともない、船便は再び廃止、栈橋は用済みになった。

「現在跡地には、朽ち果てた橋脚材が数十本と明治天皇上陸記念碑が残っています」

森町の歴史のおさらいをしたぐあいであって、栈橋の命運が、そのまま町の盛衰とかかわっていた。

「森は、噴火湾の南端に近い大きな村だが、今にも倒れそうな家ばかりである」（高梨健吉訳）

イギリスの旅行家イザベラ・バードは明治初期の日本を訪れ、克明な記録を残したことで知られている。その『日本奥地紀行』の明治十一年（一八七八）八月のくだり、馬で函館を発ち、札幌本道を通って森村に着いた。途中の記述からわかるのだが、本道とはいえ駒ヶ岳の西の森林を抜けるあいだ、みすばらしい茶屋があるだけで、道路に「五匹の大きな蛇がとぐろを巻いていた」らしいのだ。

おりしも森は定期船の運航が始まって六年目、「今にも倒れそうな家ばかり」が、にわか景気であわただしくつくられた町並みをつたえている。つづいて「たくさんの女郎屋があり、いかがわしい人間が多い」。

明治天皇が訪れたのは三年後のことで、栈橋からまっすぐの道の正面の宿に入った。現在のうっそうとした古木からも推測がつくが、当地きつての旅館であって、バード女史もそこに泊ったのだろう。「私はこの宿屋が気に入っている」。そのころは見晴らしがよかったようで、眼下の海、かなたの駒ヶ岳、栈橋がよく見えた。新興港町には一山狙いがワンサと出入りしており、朝の二時

まで芸者をあげて歌ったり、踊ったりの大騒ぎ。それでも名のとおり「鳥」のように自由なイギリス女性は、北海道の初秋の美しいことを正確に見てとっている。空気が澄んでいて涼しく、すでに紅葉が始まっていた。

翌朝、「汽船だよう」の声にとび起き、棧橋へ急いだ。ちっぽけな蒸気船で、ゼイゼイあえぐように港を出ていく。おりしも駒ヶ岳は火山活動のさなかで、二十年あまり前の安政三年（二八五六）に噴火したばかりだった。昭和四年（一九二九）の大噴火では海沿いの砂原集落が荒廃した。イザベラ・バードが室蘭へ去った朝にも、しきりに噴煙を上げていたのだろう、舞い落ちる「赤い灰」がキラキラ輝いていたという。一帯が火山灰の土地であり、港としてはつねに函館や室蘭に利をさらわれていたことがうかがえる。

そんなことを思いながら森町の新しいメインストリートに入ると、目を丸くする。おシャレなブティック、明るい薬局、モダンな写真館、いかにも老舗の種苗店……。かなりの長さの通りの両側をズラリと味のある店が占めているのだ。おおかたの地方都市ではカンコ鳥が鳴き、商店街がシャッター街と化したなかで、この晴れやかな賑わいは、いったいどうしたことだろう？

両側の歩道が広くとってあって、店のまん前で駐車できる。店ごとにファサード（正面）の工夫がこらしてあって、デザインと飾り文字がたのしい。どれといわずケバケバしいのはなく淡い色合いに統一してあって、通り全体が落ち着いた雰囲気をつくっている。そのうち気がついたが、正面の壁のどこかに1926・1938・1956という四ケタの数字が見える。どうやらそれが店の始まりの

年であることがわかってきた。メインストリートに移ったのは新しくて、開業そのものは古い店がある。さすがにバード女史のころからのケースはなさそうだが、明治の世にはじまるのもまじっている。同じアラビア数字で標示して、「創業明治〇〇年」などと、これ見よがしにうたわなないところがおくゆかしい。

通りが二手に分かれて商店街が尽きた。一方は海に沿って、他方は山手に入り、ともに駒ヶ岳を迂回していく。山手へ向かう坂の途中に町役場があつて、筋向かいにレストランが見えた。白いカーテン、工夫のあるメニュー、白いクロステーブル、小さな飾り絵、どれといわずエレガントで、自分がいまどこにいるのか、頬をつねりたくなった。花の銀座、パリの横丁、いや、北海道森町だった。

品のいい女主人に、それとなく町の通りのことをたずねると、新しい町づくりにはイタリヤのナポリが手本になったそう。湾の向こうに火山ヴェスヴィアスを望むナポリは、港をはさんで駒ヶ岳を望む森町とよく似ている。通りの店は、色、デザインすべて町づくり協議会の検討を受けている。やっとここまでできたという。

「いい感じの通りになりましたね」

「ええ、まあ」と、女主人は言葉少なにほほえんだ。

町が火山灰の土地であることはバード女史の記述からもわかるが、早くから土地改良にとりくみ、痩せ地に強い豆類を手はじめにして、ジャガイモ、アスパラガス、果実の生産地につくり変えたし、火山灰を軽石ブロックに活用する方法もあみ出した。マイナスをプラスに変えたわけだ。

漁はスケトウダラ、サバ、コンブが主体だったが、温暖化の影



北海道電力森地熱発電所の蒸気生産設備

響で魚影が急に变化する。そのつど新しい漁場や養殖法を開拓してきた。駅前広場に面して商工会館があって、正面の看板に絵入りで産物が明示してある。駅舎と隣合って商工会館を据える発想がおもしろい。

広場をさみ駅の向かいに、おもわず「オッ」といいたくなるようなホテルがある。外観、入口、フロントのつくりなど、パリ郊外のプチ・ホテルとそっくり。前に佇んでいて、ふと思った。鍵を受けとり、まだ明るい部屋に入り、シャワーをあびて、ベッドに寝るところがと——またまた自分の居場所を忘れそうになるだろう。

森町濁川は海沿いを北西に進み、左に折れこんで山に入っていると忽然とあらわれる。気がつくと、かなりの広さの盆地に走りこんでいる。まるでキツネにつままれたようなのだ。ぐるりは衝立のような山並みで、中にお盆のような平地がある。

濁川神社の開拓百年記念碑によってわかるのだが、明治三十年（一八九七）、長野出身の大場又二郎率いる開拓団が入植した。「熊吠え、鬱蒼たる熊笹、昼なお暗い原始林」とあるが、開拓期の北海道そのままの姿だったのだろう。リーダー又二郎は土地の特色をきちんと調べていたにちがいない。四方の山並みが風を遮り、陽差しと水に恵まれている。開拓地として、これ以上の条件があるだろうか。さらに判明したところだが、地下に豊かな湯脈があり、お湯がコンコンと湧いて出る。湧水が濁っているところから「濁川」と命名されたが、その濁りが地中の資源の先触れだった。開拓初期の北海道の米づくりは、どこも冷害に苦しめられたが、湯脈の土地は土があたたかいのだ。濁川はやがて「稲穂揺れ地熱と

いで湯の里」の名をいただいた。

稲穂といで湯はいいとして「地熱」とは何だろうか？ 温泉街を抜けると広い田をはさみ、山裾に何本か白い煙突が出ていて、勢いよく白い蒸気を吹き上げている。目を転じると、山の中腹にポツリと四角い建物がのぞき、同じく蒸気を吹き上げている。北海道電力森地熱発電所であって、出力五万kW（キロワット）。全国でも有数の発電力を誇っている（現在は二万五千kW）。

ちなみに日本の地熱発電の歴史を見ていくと、フシギなことに気がつく。昭和四十一年（一九六六）に岩手県の松川で最初の発電所がつくられてより、電力量は順調にのびていく。一九七三年の第一次石油危機、七八年の第二次石油危機に際しては通産省（当時）が音頭をとって新エネルギー開発「サンシャイン計画」を発足させた。つぎつぎと開発計画が整備され、地熱発電電力は飛躍的に増大した。

ところが一九九六年以後、認可出力は約五二〇MW（メガワット）に定められたきり増加をみず、翌年、地熱発電は国の新エネルギー枠から除外され、以後、発電量はゆるやかに減少をつづける。理由はいうまでもないだろう。国のエネルギー政策が原子力発電に一本化され、地熱発電は見捨てられた。

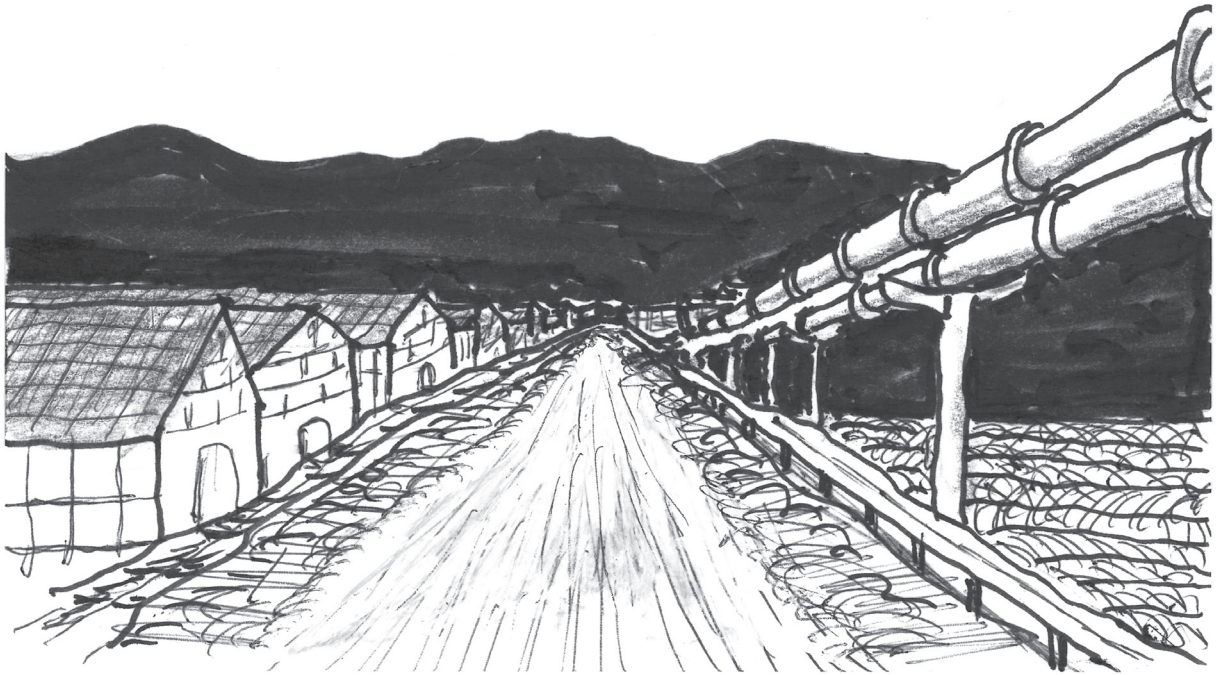
現在、日本で稼働している地熱発電所は十七ユニット、総数二十。これだけでも年間発電電力量は二十八億kWに及んでいる（『温泉の百科事典』丸善出版）。日本は世界有数の温泉大国であって、ゆたかな地熱資源に恵まれている。しかもこれは二酸化炭素を出さず、きわめてクリーンな発電なのだ。ドイツは段ちがいに温泉は少ないが、脱原発を決定したあと、大々的に地熱発電に

とりこんでいる。

これだけの温泉大国でありながら、現在まで地熱発電所のあるのが全国にわずか十七ということからもわかるように、日本ではこの分野が進まなかった。発電の適地は温泉地であって、土地の利害とぶつかる。計画がもち上がると、きつと温泉関係者が反対の声をあげる。温泉地のイメージがこわれる上に、熱水を発電にとられると温泉が枯渇（こわ）しかねないというのだ。地熱資源と温泉資源を分けて考えており、つねに温泉資源が優先してきた。

しかし、もともと両者は同じものであって、分ける必要は少しもない。現に世界的には区分して考えていないのだ。地下の熱水の採取量の問題であって、地下の貯留層から熱水の採取が供給ベースを上まわらなければ何の影響もない。半世紀に及ぶ日本の地熱発電のデータからも、発電が温泉に影響した事例は一件もなく（同『温泉の百科事典』）、枯渇したのは、もともと湯脈が尽きていたのか、旅館の大型化による熱水のとりすぎにかざられている。

だが、温泉町における温泉関係者の発言は強いのだ。旅館主が町議員のケースも少なくない。地熱発電計画は審議にかかる先に門前払いをされてきた。その点、森町の決断は原野を切りひらいた開拓団とよく似ている。第一世代は原野を田畑に変えた。第二世代は地下資源を財源に変えた。濁川の盆地の半分は米をつくり、もう半分は栽培トマトの畑になっている。山裾で熱水と蒸気を分離し、熱水は温泉に、蒸気は山腹の発電所と広大なトマト畑へ送られている。ほんの一時間ばかりの散歩中、荷台にもぎ立てのトマトを載せた軽トラを何台見たことだろう。コマねずみのように走って、神社前のホクレンの倉庫へ運びこむ。



濁川の蒸気パイプとトマトハウス

フクシマの重大事故のあと、地熱発電が再び脚光をあびている。温泉地が毛嫌いする時代ではないのではなからうか。この間にも発電技術が大きく進み、新しい方式だと旧来のような大がかりな工事が不要になった。温泉地の旅館によっては、所有の源泉で発電して、宿の電気すべてをまかなっているところもあるのだ。あまりあまる湯を流しっぱなしは、あまりにもったいない。熱水による栽培野菜は雇用を生み出し、それがまた町の金庫をうるおすはずだろう。現に森町のトマトは、東京郊外のわが町のスーパーにも、まっ赤な顔をのぞかせている。

発電所が温泉町のイメージを損うだろうか。濁川の温泉客の見たいもののナンバーが発電所なのだ。私もまた宿の主人に教えられて、整備された山道をトコトコと歩いていった。建屋と大きな塔など、外観は写真で見た原発と似ている。エネルギー源がちがうだけで発電の仕組みは同じである。ただ地熱蒸気は原子力とちがいで、処理不能の核燃料も、放射能汚水も残さない。発電用のタービンを回すと、温泉の湯けむりと同じく、ワヤワヤと空に消えていく。

町にもどり、列車の時間待ちのあいだ海沿いに出た。浜から少しはなれた海中に石柱が立っている。茶ばんだ台石の上に白いのがスックとのびている。栈橋跡の説明板のいう明治天皇の上陸記念碑にちがいない。前方の浜に人かげ一つなく、空が途方もなく広い。振り返ると雄大な火の山。遅まきながら、ここには開拓者魂を育てるのに欠かせない一つ、とびきり美しい自然がそなわっていることに気がついた。

(いけうち おやち)